「わが恩師」

松島 敏春

財団法人淳風会　倉敷第一病院呼吸器センター

川崎医学会誌には，“この師にしてこの弟子あり”と納得したり，あるいは，“この先生にはこのような師がおられたのか”と頷きながら読むことの多い，「わが恩師」という興味深い連載記事があり，原稿を募集されていることも承知していた。そのうち原稿の依頼がくるようになったが，私にとっては大変難しい主題であった。それは主に次の三つの理由による。第１に，私は３人の恩師を有するが故に，それぞれ教えを受けた期間が短く，他の先生方のような濃厚な師弟関係がないように思えること，第２に，教えを受けとる側の私のレセプターが不十分であったこと，第３に，いらざることを書いて恩師を汚す可能性があるのではないかという恐れのあることであった。

３人の恩師は，故河盛勇造熊本大学教授，徳臣晴比古熊本大学名誉教授，故副島林造川崎医科大学名誉教授である。副島林造先生は永く川崎医科大学の教授をされており，その御業績やお人柄はすでに皆さま方が御承知のとおりである。副島先生の思い出を書くのは，私にとってはいまだ生々しい感じがするので，割愛させていただく。先生は，固い信念と情熱の持ち主であり，多くの川崎医大卒業生がその門をたたいた。研究面では二木芳人昭和大学教授，岸本寿男国立感染所研究所室長，中島正光広島国際大学教授，宮下修行川崎医科大学講師，吉田耕一郎昭和大学准教授などがおり，沖本二郎川崎病院呼吸器科部長をはじめ，素晴らしい臨床医として加藤収，矢木晋，川西正泰，荘田恭聖，原宏紀，中浜力，安達倫文，守屋修，角優，など多士済々で，各方面で活躍しておられる。川崎医科大学の学生選抜基準について話し合っていた折であったと思うが，“医師に最も必要なものは人間愛で，人を愛することのできる人は医師となれる”と教えていただいたことを記憶している。この言葉は私に対する教訓でもあったであろうと思うし，その実践ができたか否かは，患者さんたちの評価を待たねばならない。ただ，最近の軽薄な風潮に流され，患者のわがままな要望に安易に乗じている己の診療態度を，さびしく反省することがある。納得が得られるまで説明し，正しいと信ずる診療を遂行する情熱が乏しくなってきているのである。

徳臣晴比古先生は熊本大学（正しくは当時は熊本医科大学）をご卒業の後戦地に赴かれ，復員後第一内科に入局されて，美甘（のち東大教授），桂（のち新潟大学教授），勝木（のち九大教授），河盛教授の時代を過ごされた，生粋の第一内科出身の教授で，水俣病の原因が有機水銀であることを突き止められた偉大な先生である。日本精神神経学会賞（森村賞），朝日文化賞，フランス生命研究所賞，熊本日日新聞社賞，熊本県近代文化功労者顕彰，勲二等瑞宝章などを受賞されている。先生は戦地で九死に一生を得た経験をお持ちとかで，泰然自若，古武士の風情のある方であり，強い信念をお持ちであった。将に大物の風情があり，交遊も広く，熊本大学医学部同窓会（熊杏会）の会長を長年，多分20年近くやっておられたのではないかと思う。入

別刷請求先
松島敏春
〒710-0826　倉敷市老松町５丁目３番10号
㈶淳風会倉敷第一病院
電話：086（424）1000
ファックス：086（421）4254
Ｅメール：mdmatsu@mx3.kct.ne.jp

局３年目から川崎医科大学に赴任するまでの６年間，徳臣先生の指導を受けた。先生の指導法はおおらかであり，好きに任せておられる感があった。ただ，急所は抑えられており，“松島は野球（当時第一内科は医局大会で強かった）同様，直球には強いが，カーブに弱い”というのが，私の結婚式における祝辞の言葉であり，“自分ではわかっているが，聞いている人に分かってもらう努力をしようとしない”というのが，私の発表に対する教えであった。先生の御専門は神経内科であり（当時の教授の常として，内科全般に詳しかったが），私は呼吸器を専門としていたため，研究面あるいは学会，研究会，出張での深いお付き合いがなかったように思う。徳臣先生が教授に就任された後の最初の日本内科学会総会における発表は，私の学位論文“Experimental studies of blood-borne metastasis and induced tumor in injured lung”であった（当時の内科学会総会の発表は教室を代表して教授が発表されることになっていた）。質の良くない内容の発表で，先生に申し訳なく思った。そこで大学院修了とともに研究の続きを国立遺伝学研究所ですべく，同研究所の特別研究生となることを許可していただいた。６年間という短い師弟関係であり，期待に添えるような弟子でなかったことを申し訳なく思う。先生はゴルフがお好きだったので，医局を離れたのちもよくご一緒した。毎週木曜日10時から，結核病棟の教授回診であった。当時結核の入院患者は20名であり，長期入院が多かったので，回診は１時間くらいで終わった。その後悪い結核病棟主任（私）が，時々教授とゴルフに出かけていたのである。現在では考えることもできないことであるが，当時はありえたのである（先生申し訳ありません）。ゴルフの思い出だけはたくさんある。悪い弟子であるため，負けようとすることなどまったくなかったし，別府へゴルフに出かけ，その帰りを私の車に乗られた翌日，教授秘書から“先生が黙っておられることを良いことに，無茶な運転をしてはいけません”と叱られた。最後にゴルフをご一緒したのは阿蘇東急ゴルフ倶楽部であったと思う。私はその後直接欧州での国際化学療法会議に出発することになっていた。最後から３番目（16ホール目）までは私が先生より１打差で勝っていた。谷越えのティーショットを前に私が“こんな狭い谷に落とすようではどうにもなりませんね”と言って打ったところ，谷に落としてOBをした。そのため先生に１打負けてしまった。91歳になられた先生からの今年の賀状に，もうゴルフができなくなったと書いてあったので，最後のゴルフを負けていて本当に良かったと思っている。

私は東京オリンピックの年，昭和39年に熊本大学医学部を卒業し，九州で最も優れた研修病院とされていた九州厚生年金病院で，１年間のインターン生活を送った。父がビュルガー氏病の手術を受け，崇拝してやまない元熊本大学教授，東陽一先生が病院長であったことも，病院の選択に関与していた。医局からの入局勧誘などほとんどなかった時代で，目的も，興味も，意欲もほとんど明快でないまま，母校の第一内科に入局した。当時の教授が河盛勇造先生であった。

河盛先生は大阪大学のご出身で，第３内科の助教授を経て８年前（昭和32年）に熊本大学第一内科の教授として赴任されていた。入局する前には先生のことも医局のこともほとんど知ってなく，講義や実習，先輩の話などから怖い先生であること，学問的であることを感じていただけであった。先輩の先生方の話では，私どもが入局したころは大分柔和になられたとのことであったが，大変怖い先生であることに違いなく，教授回診は医局員一同緊張（恐怖）の極みにあった。回診の後は全員での昼食会であったが，新参者の私などは砂をかむような食事であった。“教え厳ならざるは，師怠るなり”ということを信条としておられたのであろうと思われるし，この言葉も先生から最初に伺ったような気がする。もっとも，医師としての姿勢，診療，研究には厳しい先生であったが，私生活面ではやさしい，あるいは，思いやり，心配りのある先生でもあった。同級生３人で先生のア

パート（当時すでにご家族は大阪へ越しておられ，先生は単身生活であった）に遊びに行ったとき，酔いつぶれた大酒家の同級生をトイレでやさしく介抱された姿を今でも思い出す。媒酌人（熊本における最後の）をしていただいた折にも，家内のお産のときにも優しい心配りをいただいた。病院からの帰りを私のボロ車で送ることがあったが，先生は助手席に座られ，“暮れ時は見えにくいので注意するように”など，病院における厳しい指導とは全く異る態度での諭しであった。

“鉄は熱いうちに打て”という言葉がある。逆に，熱い（若い）うちに教わったこと，身にしみたことが最も身に付くものであろう。指導いただいたのはわずか２年間にすぎなかったが，私の第一の恩師，憧れとする医師，理想とする医師，私の偶像は河盛勇造先生である。私が入局した時の身分は大学院生であったが，“全くの”，あるいは，“普通の”医局員生活で，夜間だけ大学院生らしく実験をする毎日であった。日曜日といえども，患者さんに変化があれば病棟から電話があった。直ちに赴き，たとえば発熱のある患者さんであれば，少なくとも末梢血白血球数，検尿，咽頭培養を直ちに行い(当時はいろんな検査を医師が行っていた)，考え方の道筋をつけ，処置をしておかねばならなかった。徹底的に教わったのは，臨床における論理的な診断，治療の進め方，考え方とその実践であったと思う。それを十分実践できたか否かには問題が残るが，十分心がけてきたつもりである。私自身も教室の人たちに“そのような診療をやっていては，いつまでたっても臨床医学が科学とならない”と言ってきた。また，胸部画像診断を理論づけて読影する方法の確立を模索してきたし，その考えの下に教科書も書いた。日本呼吸器学会の「呼吸器感染症に関するガイドライン」の作成委員長として肺炎等に関するガイドラインを作成するにあたっても，科学的な考え方を押し通したつもりである。先生の教えを誤解している可能性が無きにしもあらずではあるが，私は臨床医学も科学にならなければならないと思っている。ここ10年近くの臨床医学の方向は，この私の願いと異なってきているように思える。毎日の診療で矛盾を感じることが多く，また，志し半ばにも達せず，医学の道から離れることになってしまった。

河盛内科は４つの研究グループに分かれていた。１研は肺癌や免疫を研究するグループであった。２研は神経グループが主で，生化学，消化器，循環器をする人もいた。３研は抗酸菌，結核の研究グループであり，４研は細菌感染と化学療法の研究グループで，この２つのグループが教授室などのある５階にあり，河盛先生直接の厳しい指導によっていたので，６階にいる私（１研所属）共は羨ましがられた。研究グループが分かれていたとはいえ，回診，研究発表会，抄読会，そのほか教室の行事は一緒であり，実験の手伝いなども交互に行っていたので，幅広く勉強していたことになる。卒後研修のあり方として最も望ましい形態は，このような大医局性であろうと今でも私は思っている。例えば，肺癌の実験を命じられていた私が，最初の抄読会の折に教授から手渡れた（初回のみは教授の手渡し）文献は，結核菌の INH に対する自然耐性に関する論文であったし，最初の症例のまとめは５例の腸チフス患者であった。また，３研所属で結核菌の実験で学位を取られた安藤正幸熊本大学名誉教授は呼吸器免疫の権威となられ，日本呼吸器学会の理事長も務められ，河盛先生が第５回総会を主催された呼吸器学会総会の38会総会を開催された。同じ３研で非結核性抗酸菌の研究をしておられた副島先生は化学療法の大家となられ，河盛先生が第14回総会を主催された化学療法学会総会の第34回を倉敷で開催された。河盛先生は BCG の研究で朝日文化賞を受賞しておられるように抗酸菌の研究が最も専門であった。先生が主催を希望しておられた日本結核病学会総会を，１研で癌の研究に始まった私が倉敷で開催し，先生と同じく秩父宮妃記念結核予防事業功労賞を受賞し，結核病学会名誉会員にも選ばれた。同じく１研で SMON の研究をしていた１学年下の津田富

康先生は大分医科大学の教授となり，サルコイドーシスの権威となられた。最初の実験課題は研究の始まりであり，いろいろと幅広く学びながら，そのうちに得意の分野も作っていくようなシステムが用意されていたのである。

第一内科に入局し，診療姿勢を回診などの機会に徹底的にしごかれ，大学院生としての実験を月１回の研究打合せ（先生は几帳面にノートされていた）でチェックされ，緊張した新入医局員生活を送っていた。しかし先生は，定年まで10年を残して，突然教授を辞め，国立泉北病院院長として大阪へ帰って行かれた。その後香雪記念病院院長などを歴任され，昭和60年に勲三等旭日中受賞を受賞されたが，平成11年に御逝去された。

私は河盛先生の高弟あるいは良い弟子には列していないと思っているし，先生もそう思っておられたと思う。また，私の将来に時に危惧を抱いておられていたであろうと想像している。それでも河盛先生，あるいは，先生の生き方は私の憧れであり，先生は私の偶像でもあった。最もあこがれたのは，先生の潔い生き方であった。先生の潔さをまねることができたらと思ってやってきた。しかし，医師としての診療活動の終末期を迎えた現在，私が先生から学ぶべき最も大事なことは，先生の確固たる信念であったと思うようになってきた。

河盛先生は明治（44年），徳臣先生は大正（６年），副島先生は昭和戦前（５年）のお生まれであるのに対し，私は戦後の教育を受けた人間である。私が３名の恩師にもっとも偉大さを感じ，私との最も大きな違いを感じるのは，信念の強さ，ゆるぎない信念である。明治，大正，昭和生まれと漸次信念が揺るぎ，戦後の教育を受けた者は軟弱になってきたのではないか。時代だけではなく個人差も大きいことはよくわかるが，恩師方から受ける印象では，時代背景を感じざるを得ない。

私は３人の恩師から，何事にも左右されない，ゆるぎない信念を学ぶべきであった。河盛先生が私の将来を危惧しておられたとしたら，私の信念のなさであったろうと察する。恩師の真の教えを受け止め，実践する努力を怠たったことを，この世に生を受けた人間としてお詫びすべきである。

自他を評価する基準は，人により大きく異なるものである。医師として，人間としての使命を将に終わらんとしている私の，診療，研究，教育におけるレベルは決して高かったとはいえない。しかし私自身は，私なりにやるべきことはやったという満足感があるし，恵まれた人生であったと思っている。恩師をはじめとする先生，先輩方，同僚，友人，後輩，家族のおかげであり，感謝に堪えない。

この拙文を此処までお読みいただいた先生がおられたら，植木絢子先生（前川崎医科大学教授）の好著を下の参考文献に記したので，是非御一読をお勧めする。この連載記事とも関係していると考えるからである。

参考文献

1）熊本大学医学部第一内科同門会；熊本大学医学部第一内科創設75周年記念誌：436，1996
2）熊本大学医学部第一内科同門会：河盛勇造教授時代特集．熊本大学医学部第一内科同門会誌　21：102，1994
3）熊本大学医学部第一内科同門会：河盛勇造先生を偲んで．熊本大学医学部第一内科同門会誌　25：146，1999
4）徳臣晴比古：水俣病日記．熊本，熊本日日新聞情報文化センター．1999，PP170
5）植木絢子訳；知られざる科学者　ペッテンコーフェル（カール　ヴィーニンゲル著）．東京，風人社，2007，PP313